

## 港支部研修旅行、平成29年6月16日(金)～21日 ヴィエナ

大谷 報告

参加者 15名 高杉夫妻、越阪部さん+1、西倉夫妻、大谷・岩井さん、川又・吉田さん、山田・塚本さん、磯永・清野さん、加藤さん ※部屋ごと、順不同。

FINNAIR AY074 NARITA 11:00 発 HELSINKI 経由 FINNAIR AY87 18:35 発 VIENNA  
時差 ヘルシンキ、サマータイム中－6時間、 ウィーン－7時間

ウィーン国際空港には JTB 手配の男性職員の迎えを受け大型バスでグランド・ホテル・ウィーンまでの送迎とホテルレセプションでの簡単なお手伝いをしてくれた。

ホテルに着いたのは現地時間で20時30分頃、同室者は岩井さん。荷物を置いただけですぐに街へ出て夕食、とは言っても15人がいきなり入れるところはなく、適当に我々もばらけて、岩井・磯永・清野・加藤・私の5名のグループでホーフブルク、アルベルティナ(旧ハプスブルク家邸宅)にある**アウグスティナー**ケラーでビールと豚腰肉、骨付きを持てあましながら、半分以上残しての夕食となった。



このまま帰るのももったいないので、街の中心シュテファン寺院まで歩いた。ライトアップされた寺院は期待ほどではなかったが、この界限には結構人が出ていて賑わっていた。せっかくここまで来たので**アメリカンバー**(アドルフ・ロース設計1908年)を覗いてみたが、やはり人気ポイントと見え外のテラス席まで満員、結局今夜はあきらめてホテルに戻る。

### 17日(土)

ホテルの朝食は6時半から、前日が長時間の移動と遅くまで活動で明日は少しゆっくり、の予定でいたが結構皆さん早めで、6時半頃から三々五々レストランに集まり食事を取った。バイキング方式ではあったが、和食、ご飯・味噌汁・納豆・卵焼きなども有り、牛乳にはバター牛乳など初めてのもの、卵料理やステーキなどもオーダー出来、食事の内容には満足。

なんとなく8時半にロビー集合。今日はどこを回ろうかとの話になり、私は予定通り応用美術博物館から回ることにしたが、多くの方は岩井さんの薦めるドナウタワーへ地下鉄で向かう。私は単独でトラムを使って**応用美術館**へ向かう……が、確認しないで飛び乗ったトラムは目的へ向かっている様子がなく、3・4駅を通過したところで下車。

すっかり迷子になり通りがかりの女学生に現在地を聞いてみると、ちっとも目的に向かって無く、結局そこから歩いて応用美術館へ向かうこととなった。

なんとか市立公園にたどり着き、予定とは順序が逆に、**シュタットパーク駅**(1903年フリードリッヒ・オーマン他)の外観、ロケーションなどゆっくり見てウ



イン川沿いに歩く。突然強風に帽子を飛ばされ、川には落ちませんように、76歳だぜ俺はと思ひながら必死に追いつきやっと取り戻すことが出来た。それからは帽子は尻ポケットに突っ込み、公園の風景を楽しみながら応用美術館へ向かう、ここで時間に気がつくと開館の10時までには30分以上ある事に気がつく、仕方が無いので月曜の予定にしている郵便貯金局の場所の確認に時間をつぶすこととした。

**応用美術館** (クリムトの壁画が見所とされている) 地味な美術館で見学者も極めて少数、



チケット売り場の受付係は日本人女性で親切にレオポルト美術館との共通入場券がある事を教えてくれ、それを購入。

この美術館には、本の装丁展示、古書の装丁、新しい本の装丁デザインが展示、古いカーペットの部屋、陶器の部屋、クリムトの壁画の部屋、加えてサイン類・現代デザインの部屋等がある。クリムトのデザインも期待ほどではなかったが、本の装丁デザインには興味を引かれた。

のどの渴いたのでこの美術館の中庭のカフェでカプチーノ。

今度は間違わないようにトラムで最初に迷子になった当たりまでもどり、徒歩でカールス教会へ向かう、教会だからちょっと覗いてみようかなと、入り口を探していると、ここで高杉夫妻に出会う、聞いてみると教会なのに入場料が要ると言われそれほどの執念も無かったので入場は止めご一緒することになった。

カールス広場をゆっくり抜けオットーワグナーの**パビリオン・カールスプラッツ**駅舎 1898年を外から眺め、複雑な交差点を抜け今回研修のメイン、ヨゼフ・マリア・オブリッヒ 1898年の**分離派館**へ、



正にユーгентシュテテル(青年様式)である。入場料は9€, 中に入ってみると、メインの空間



の展示には些かがっかり、ただ空間が迎えてくれた感じであった。上階にも最近の芸術か？。



地下に入ると建物の歴史、クリムトの壁画が迎えてくれ少しほっとする。

ウィーン分離派はグスタフ・クリムト周辺の芸術家達によって1897年に設立、初代総裁はクリムト。なお、地下の壁画はベートーベンへの賞賛として描かれたもの。第14回展でベートーベンへの賞賛として描かれたもの。

建物のコンセプトである「時代にはその時代に相応しい芸術を、自由を与えよ」という正面玄関上部に掲げられたモットーに従ってこの展示室は年に10回から15回程度分離派会員の執行役によって展示企画がされているようだ。

ミュージアムショップで少し資料を購入して、外へ出て改めて建物を眺める、単純な中にバランスのとれた装飾にすがすがしい感動を覚える。

昼も近くになってきたので、すぐ前から始まる**ナッシュマルクト(露天マーケット)**へ、野菜・魚類・牡蠣・ムール貝・各種チーズ・果物・ソーセージ・ワイン・ジャム等々多彩の食材と

レストランが軒を並べる。その一角で我々も冷えたビールと魚介類での昼食とした。

食事の後は少し足を伸ばしワグナーを中心とした設計チームによる**メダイオンマシオンとマヨルカハウス** 1899年の外観を観る、本物は書物で観るより、金色に輝くメダイオン、マヨルカハウスの壁面全体にデザインされた装飾タイル、入念に設計された窓の水切りのディテール等、真摯に物作り向かう姿に魅了させられた。ワグナー自身もここに住んだようである。



さらに世紀末を探して **cafe Spelr** 1880年へ、ここは常連客として建築家のヨーゼフ・フォフマンやオルブリッヒなど分離派メンバーが通ったと言われ、その空気を我々もと思いゆっくりとコーヒーブレイク。

ピアノ演奏もあり、当時からと言われるビリヤード台などもそのまま、歴史を大切にしている心遣いに羨ましささえ覚えた。

その後、高杉夫妻と別れ私は**造形美術アカデミア美術館**(1871年Theophil von Hansen)へこの美術館はエゴンシーレなどが学んだ美術学校内にあり3階の一翼が美術館となっている。従って正面玄関を入っても美術館らしい雰囲気はなく守衛さんが居るだけ、迷っている私を女学生が3階の美術館の入り口まで案内してくれた。チケット売り場にはおじさんが一人、廻りには見学者は皆無、入って良いのかなと思いながらチケットのバーコードを入り口扉脇のカードリーダーにかざし扉が開くのを待って入場。

入り口が厳重なせい学芸員なども居らずほとんどの場所で独り占めの鑑賞が出来た、ボッスの絵画が案内書に出ていたので期待していたが、一番奥の正面に一点だけであった。少し期待外れ。**ヒエロニムス・ボッス**(1450-1516、公式=当時職人等の身分が定められていて自由画家の資格を持つ画家)プラド美術館の「快樂の園」が有名だが、ここでも地獄に落ちた罪人が逃れることの出来ない罰を与えられている様子作品。

先日訪れたアンコールワットの第1回廊にも天国と地獄のレリーフ、ローマのシステーナ礼拝堂にも最後の審判、仏教絵画にも閻魔様に……等々、人の人生につきまとう善悪に向かい合ってそれをテーマに描かれた絵画はそれなりの魅力を持っている。定かで無いが以前、横尾忠則さんもこの様な絵をお描きになっていたと思う(未確認)。

しかしこの美術館は収蔵作品は質・量ともに立派なもので十分満足できる内容であった。さて外に出るとなんと賑やか、何かのイベントお祭り?→**ゲイの祭典**の様子、何台もの大型バスにそれらしき男?女性?が、廻りに手を振ったり踊ったり、大音響の音楽、延々と列が続き道路を横切ることも出来ないほど、近くの国々からも参加とのこと、日本だったら警官が……なども無く思いっきり楽しんでいる様子が小気味いい。

なんとかホテルまで戻り、部屋で一休み夕食は、小雨が降ったり止んだりでもあり、ホ



テルの近くで取ることにした。西倉夫妻・岩井・磯永・清野さんと私、通りすがりのファミリーレストランという感じの店で、ワイン、スープ、パスタを取り適宜シェアして、簡素な食事で済ませた。

食事の後昨日行き損なった**アメリカンバー**へ行って見る、今日は店の中まで入ることができたがカウンターもテーブルもいっぱい、中は写真などで紹介されている通りの十四・五人も入ると一杯の狭い店であった。この頃から雨が本降りになってきたが、まだあきらめない岩田さんがもう一件の見所、**cafe Hawelka** 1939年を探し寄ってみることにした、入り口まで人にあふれていたがなんとかテーブルを確保、メニューをとると「俺がメニューだ」と言うギャルソンにビールを頼み肩を寄せ合いながら店の雰囲気を楽しむ。外へ出てみると雨も小降りに夜の旧市街を楽しみながらホテルへ。

### 18日(日)

前日と同じように8時半にはホテルロビーに集まりなんとなく全員で出発、**王宮礼拝堂**で賛美歌の合唱が聴けると言う。

前もつてのチケットを持っている人は先に入場できるが、持っていない我々には当日の立ち席の無料チケットが配られ後から入場となった。

神父様のドイツ語の説教に続き賛美歌の合唱、立ち席から見える正面では大人の合唱、立ち席の頭の上の我々から見えない2階からは少年の合唱、私の知らない賛美歌ばかりで暑さと長時間の立ち姿勢で些かくたびれた。

終わって外へ出てからは各自の予定で行動、私と岩井さんは自然史博物館と美術史博物館の間を歩いて**ミュージアム・クォーターウイーン**(2001年に帝国厩舎跡を利用して出来た複合芸術施設でミュージアムやカフェなどが配されている)の中の**レオポルト・ミュージアム**へ、まずのどの渇きと立ち疲れ解消のために、ミュージアムカフェへ休み。その後展示へ、ここはエゴンシーレの作品を主に多数展示されている。

エゴンシーレ 1980 ~ 1918 年はサイコパスなどとも言われたり妹をモデルにしたり、かなり危ない作家との評価もあるが、シーレのキーワード、エロス・死・反抗から生まれた作品、絵の中からこちらを見る目には鋭い思いが伝わってくるように思えた。

そろそろ昼になったので、クォーターウイーン一角にある**カフェ・コルパチ**で軽食。その後二三のミュージアムを覗きながら南のゲートから出て **Mariahilfer Str** で岩井さんと別れ、私はハプスブルク家の居城王宮の一角にある**国立図書館** 1726年へ。世界で最も美しい図書館と言われ、約奥行78m・幅14m・高さ20m、建物の2層分を吹き抜けにしてオイゲン公の蔵書20万冊を収蔵、知は財産として地位を与えられこの様な立派な書庫を造ったものと思う。



この後はホテルへ戻り、夜のアトラクション**ホイリゲ・ディナーとシェーンブルン宮殿コンサート**に備える。ホテルロビー集合 PM5 時 30 分→7 人乗りのタクシーに分譲して約 25 分ホイリゲ（葡萄酒酒造元でのディナー）へ、ジョッキ一杯のワインと小さめのシュニツェル・野菜サラダ・ジャガイモ・鶏肉・野菜のパイ包み・挽肉ミンチのロースト。

食事が終わると次にシェーンブルン宮殿へ戻りコンサート、場所はシェーンブルン宮殿を囲む道路に面した門の左に並ぶ建物の一部、人気のツアーと見えたくさんの人が集まっていた。昼間の疲れとホイリゲのワインが効いて睡魔との戦いになる。1 部目は睡魔に負けた、15 分ほどの休みの後第 2 部なんとしても眠るまいと、頑張る。コミカルなショー形式のバレエと音楽、なかなか面白いショーで楽しむことが出来た。終わると、先ほどのタクシーが待っていてくれてホテルまで。



**19 日 (月)** 今日はウイーン最後の一日

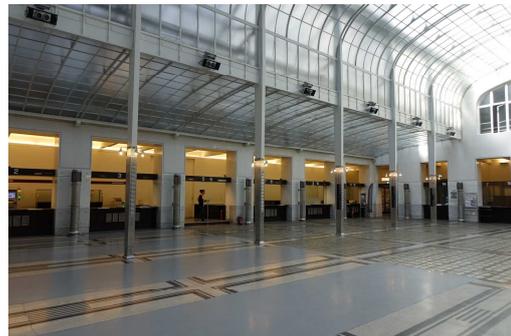
岩井さんと**シュテファン寺院**（1147 年ロマネスク教会、14 世紀に司教座教会に）をきちんと見ようと、何度も歩きなれたケルトナー通りを寺院広場に向かう、寺院の右サイド側の歩石を平板に替える工事中で、次に来る頃には歩きやすくなっていると思う。



寺院の中に入ると、身廊・側廊共に複雑なリブボルトの高い空間が存在している。ステンドグラスは控えめ、バトレスやピナクルも控えめであるが、装飾性の高いハプスブルグ家紋章を模した屋根瓦に特徴が見られる。一般的には正面サイドにベルタワーが配されるが、ここではトランセプト右サイドのタワーに数個の鐘があるようで、階段を使うとここに登れる。対する北側の塔にはエレベーターが有りプムメリンと呼ばれる大鐘がある。今日は後の予定もあるので登のはあきらめる。

次に今回旅行の目的の一つ**郵便貯金局**(1912 年オットー・ワグナー)分離派建物として欠くことの出来ない建物へ。始めに入り口が解らずぐるりと半周したが、正面から入ることが出来た。

ウイーンの近代建築の先駆けとして、鉄筋コンクリート・ガラス天井・アルミ素材などが使われ、それらが機能的なデザインで統一された雰囲気醸し出している。今も多くの建築関係者が見学に訪れるのも頷ける。



川沿いの道を次の**フンデルトヴァッサー**（自然の中に直線はないと言うのが彼のコンセプト）に向かう、写真を撮ったりしながら調子に乗って川沿いに進んだのは良かったが、交通量の多い車道を渡る羽目になり横断には些か勇気が要った。



まず、**クストハウス**(フンデルトヴァッサー 1928 ~ 2000) 1991年にガラス・タイル・金属・木材で改築したもので、1階にはミュージアムショップとカフェが有り、愛想の良い女性が軽食などサービスしてくれる。2階から上がミュージアム、フンデルトヴァッサーの作品建築模型や絵画などの展示スペース。この日も小学生達が

先生に連れられて見学していた。日本でもこの様な教育が望ましいのに……。

そこから 300m 程歩いて**フンデルトヴァッサーハウス**へ、この建物は個人所有？区分所有？で外部しか見られないが、見学者が大勢押し寄せている状況で、この一角はみやげ屋・カフェなどがひしめくフンデルトヴァッサー街の様相であった。

ここからはトラムでリングをぐるりと回ってオペラ座近くで下り、昼食のために**ナッシュマルクト**へ。

食事の後、岩井さんと別れ、暑さと脱水状態だったので、ホテル地下のスーパーで水 2 本とコーラを購入し、部屋でシャワーを浴び着替えて少し休む。

まだ 3 時、このままでは時間ももたないなので、ぶらりとまたシュテファン寺院に向かって歩き手前を左に曲がって**グラーベン通り**(ローマ時代から 1 2 世紀にかけてグラーベン=堀が残っていたことに由来)、通り中央の**ペスト記念柱**(三位一体記念像 1670 年のペスト流行終焉を記念してレオポルト 1 世が建立)を眺めてから**ペーター教会**(18 世紀ルーカスフォンヒルデブランドに立寄って改築されたウイーンで 2 番目に古いバロック建築)へ、世紀末建築、セセッションからバロックへと時代をさかのぼって見るとまたすがすがしい、何かほっとした気持ちになることが出来た、やはりバロックはすごい。

外へ出て再び世紀末建築へ、**エンゲル薬局**(1902 年に改装)正面ファサードのエンジェルは薬杯を捧げている図柄、これは壁面に装飾されたウイーン世紀末のアールデコ、デザインの代表でもあり当時のアートの方向が感



じられる。



次に何度も通った王宮前の  
**ローズハウス** 1911年アド  
ルフ・ロース、シンプルなデ  
ザインの建物の中にアール  
デコ風の街灯照明が。  
今夜は胃を休めるため夕食  
はパス。

ゆっくりバスを使い、明朝  
帰国に向けてのスーツケースの整理に時間を費やす。



20日（火曜）

ホテル最後の朝食は昨夜の食事を抜いたおかげで、美味しく取る事が出来た。

午前8時30分にバスが迎えに来てくれ、レセプションにカードキーを返して日本に向けてヘルシンキ経由で帰国。皆さん事故もなく、それぞれが充実した研修がとなりました。

あとがき



今回の私の研修活動範囲はおもにリングと言われる歴史地区を主に世紀末の建築をテーマにしました。このリングの中だけでも見るべき建物は70箇所くらいは有る様です。また十分に中身までも確認しようとするれば、何日もかかる事でしょう？

さらにその周辺まで範囲を広げると、数百という単位になってしまいこれを知るには年単位に成ってしまいそうです。

歴史的にも中世から現代に到るまでのものがそろっているのが特徴で、もちろん途中で戦争などの被害がなかったわけでは有りませんが、それをスクラップにせず修復して大切に再建して、世界遺産にも成って私達に良い教科書となっていると感じました。

十分に事前勉強もせずに行ってしまったので、後付の勉強で見学した建築などについても間違いや不十分がいっぱいですが、きっかけには成ったと思います。

建築・美術・音楽共に対象に向かう作家の真摯な態度、情熱、阿おもね無い自己表現、とてもとても教えられました。

ウィーン、正に建築・美術・音楽、が一つのハーモニーのような芸術の街と感じた研修でした。

#### 参考資料

JTB パブリッシング ララチッタ

各ミュージアム パンフレット

Springer WienNewYork Architecture Vienna